兵庫県におけるスキー場の整備過程－千種スキー場を中心に－

萱原　浩

キーワード：レクリェーション機能，交通アクセス，スキー場，都市と農山村，地域振興，兵庫県千種町

1．はじめに

兵庫北部地域では総人口の長期的な減少傾向とともに、第１次産業人口の減少が続いている。それに対して、第３次産業人口は増加していることから、伝統的な農林業を主とする農山村地域から、行政サービス、教育・文化、レクリェーションなどの機能を分担する地域へと変貌しつつあるということができる。同時に、高齢化が進むにつれて、第３次産業にかける期待はいよいよ大きなものとなっている。

本研究では、兵庫県北部のレクリェーション施設として顕著なスキー場に着目し、その立地と地域への影響について考察する。とくに、宍粟郡千種町に設立された千種スキー場の整備過程とスキー場の果たす地域的役割について分析する。

まず、兵庫県北部のスキー場の立地を自然的条件の点から明らかにする。次に、スキー客の大半を占める兵庫県南部の都市地域から、スキー場へのアクセス経路である交通ネットワークの現状について検討する。続いて、千種町の歴史と社会的条件を整理し、千種スキー場の整備過程について考察する。これらに基づいて、スキー場を中心としたレクリェーション空間のもつ農山村地域における意義を明らかにした上で、兵庫県北部のスキー場の地域的課題を展望する。

そのため、文献資料および、国勢調査報告書や観光客動態調査報告書などの統計資料により、地域の実態を把握する。また、千種町役場およびスキー場企業組合でのインタビューと資料収集、とくに、千種スキー場の詳細な運営資料と利用状況調査票の分析から、維持管理およびスキー客の動向を探る。

表1　兵庫県内のスキー場（出所：各スキー場資料より作成）

ブロック	スキー場	（新名）	リフト本数 S	P	T	Q	最長滑走距離 (m)
神鍋高原	神鍋高原		18	13	2	1	3100
	大岡山						
	アップかんなべ						
	名色						
	万場						
	奥神鍋						
	アルペンローズ						
氷ノ山・鉢伏山	ハチ高原		11	4	2	1	3000
	ハチ北		4	4	1	2	3500
	氷ノ山国際		1	4			2500
	氷ノ山山麓		3				600
	東鉢伏高原葛畑		1				
	東鉢伏別宮	ハイパーボウル東鉢					2000
周辺山岳	県立但馬牧場公園		1	1			1500
	ニューおじろ		2	2			1200
	ミカタ奥ハチ	ミカタスノーパーク	1	2			2000
	ソラ山	スカイバレイ		4		1	3600
	若杉高原大屋		2	1			700
	ぱんしゅう戸倉		2	2	1		1000
	新戸倉		1	1		1	2000
	千種高原			4			1200
	六甲山人口		2	1			200

2．兵庫県におけるスキー場の分布

兵庫県北部のスキー場は西南日本に立地するため、いずれも自然的条件の面で不利がある。とくに近年の暖冬のトレンドと冬季気象の年変動によって毎シーズンの積雪量は安定せず、スキー場の経営も大きく左右されている。しかし、当地域のスキー場は西南日本の大都市圏から近いという、社会的条件の面で有利な特長を備えている。

1998（平成 10）年現在、兵庫県内に立地するスキー場は 21 にも及ぶ（表１）。その分布は県内に万遍なく散在するのではなく、神戸市の六甲山人口スキー場を除いて、北部地域に集中している。天然雪を資源とするスキーというレクリェーションが、その施設を北部山岳地域に集中させることは必然である。また、兵庫県においては 1925（大正 14）年頃から、一つは大机山を中心とした神鍋高原、もう一つは氷ノ山・鉢伏山のツアースキーから、スキーが文化として発展してきたことを鑑みなければならない。したがって、兵庫県内のスキー場の分布については、空間的位置関係だけでなく地形や気候などの自然的な要因と、歴史的な発展過程を総合して検討する必要がある。こうして、３つの地域ブロックすなわち、神鍋高原ブロック、氷ノ山・鉢伏山ブロック、周辺山岳ブロックに分けることができる（表１参照）。

スキー場の北部地域への集中と偏在に対して、その利用者の多くは南部都市地域に居住するスキー客である。彼らが日常的に居住し、労動し、サービスを受けている生活空間と、休日に自らの趣味を実現するレクリェーション空間との間を往復するのである。したがって、その接続経路となる兵庫県南部と北部とを結ぶ交通ネットワークが重要な役割を果たすことになる。

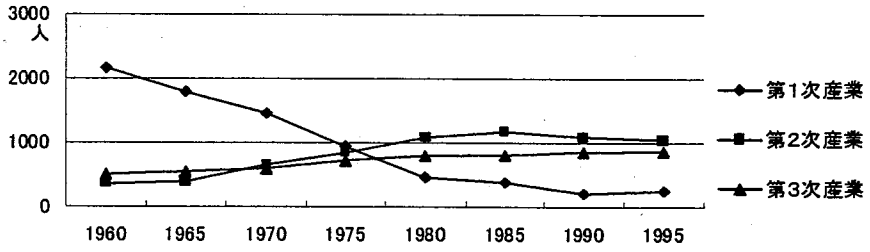

図1 千種町の産業別人口の推移
出所:各年国勢調査報告書より作成

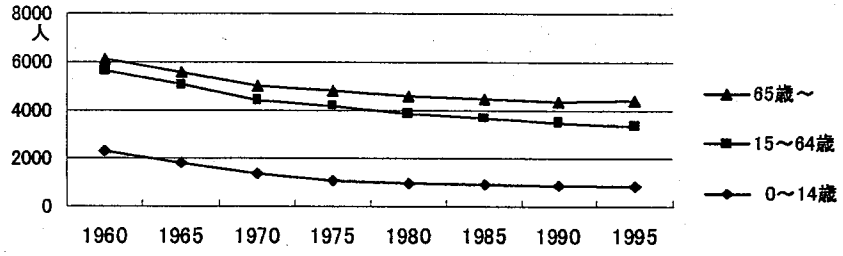

図2 千種町の年齢別人口の推移
出所:各年国勢調査報告書より作成

3．千種スキー場の整備過程

播磨の国の北西端、兵庫県宍粟郡千種町は千種川の最上流域に位置し、山林面積が町域の93％を占めることからも、第1次産業の衰退（図1）の影響で人口減少が続いている。しかも、幼年人口・生産年齢人口の減少と高齢人口の増加（図2）によって高齢化が進んでいる。

千種町は、人口減少に対する打開策として 1981(昭和 56)年に「千種アクティブハイランド構想」を策定し、町の強力な指導のもとスキー場新設が計画された。1985(昭和 60)年には、予定地となった西河内地区の住民が中心となって資金を出し合い、「千種高原開発企業組合」が設立され、翌 1986(昭和 61)年に千種スキー場が開設された。

開設以来、千種町全体の人口は減少しているのにもかかわらず、スキー場の立地する西河内地区の人口は増加に転じている。また、以前には夏季のみの雇用であったゴルフ場や森林組合の従業者を冬季の定期雇用に転換することができ、通年および季節的な人口流出の抑制とスキー場の労働力確保とをトレードオフによって実現している。

千種スキー場の入込み客数の推移（図3）をみると、不安定ながらも年々増加傾向にあることがわかる。ところが、最近の 1996(平成8)年以降2年続けて減少している。とくに 1997(平成9)年は、記録的な暖冬に見舞われ 1989(平成元)年の水準にまで落ち込んでいる。今後雪不足の問題はますます深刻化するものと考えられるが、千種スキー場では、人口造雪機の設置やナイター設備の運用によって、利用者の獲得に努めているところである。

千種スキー場が、積雪量の点で不利にもかかわらず、着実にスキー客を確保してきた最大の要因は、中国自動車道を経由する交通アクセスの便利さである。そのため、阪神大都市圏および、姫路、岡山方面からの日帰り客の占める割合が非常に多いのが特徴である（図4）。したがって、日帰り客のニーズに合わせた施設整備とサービスの展開が今後一層重要になってくる。

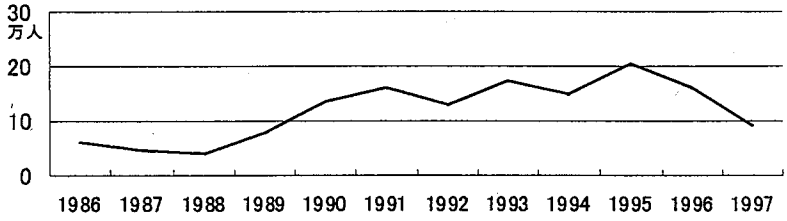

図3 千種スキー場の入込み客数の推移
出所:千種スキー場利用状況調査票より作成

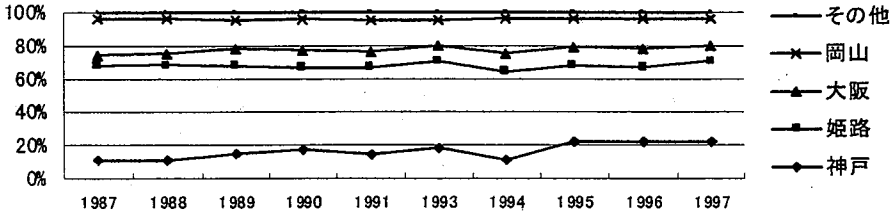

図4 千種スキー場における駐車場車両ナンバーからみた地域別入込み数の推移
出所:千種スキー場利用状況調査票より作成

4．兵庫県におけるスキー場の地域的役割

近年、個人生活の面で人々のレクリエーション活動への欲求が高まっている。また、社会全体のハイモビリティ化の動向も個人の生活空間の拡大を促進している。しかも、そうしたレクリエーション活動の内容は、従来の「みる」から「する」へ、また、その形態も周遊型から滞在型へ変化してきている。このような個人の意志決定や空間的行動は、その地表面への投影である地域の景観と機能に影響を及ぼさないではいられない。その結果としての地域変化もまた、個人の意志決定や空間的行動に強く影響を及ぼすのである。

従来、地域形成に大きく関わってきたのは、人間が居住し、労働し、サービスを受けるという機能であった。これらに加えて、近年の地域形成においては、教育・文化機能とレクリエーション機能の影響が顕著になりつつある。とくにレクリエーションについては、最近の生活様式の変化と多様化や、いわゆる環境ブームに関連して、野外活動やアウトドアの趣向が盛んになってきた。個人生活と社会的条件の両面からレクリエーションの重大性が増しつつあるといえよう。これに呼応して、レクリエーション空間の開発を地域振興の促進要因と位置づけ、積極的に推進しようとする動きが高まっている。兵庫県北部地域では、スキー場および関連施設がそれに当たるものである。

現在、兵庫県内に立地するスキー場は、東北日本に立地するスキー場に比べて、各年の気象状況による積雪量変動などの不確定要因のため営業日数が安定せず、入込み客数が大きく左右されている。このような状況にあっては、阪神大都市圏からの日帰りスキー客に支持されることが、立地の条件として大きな割合を占めている。

したがって、兵庫県北部のスキー場の立地には、リフトやコースなどゲレンデ施設のハードウェアだけでなく、交通網の整備状況などの社会的条件も強く関与していることになる。兵庫県北部地域と阪神大都市圏とを結ぶ交通ネットワーク（図５）のフローを増大させるためには、一方のノード（結節点）であるスキー場の施設および、リンク（連鎖点）である交通網を整備拡充する必要がある。その過程で地域は変化し形成されていくものと考えられる。

5．おわりに

本研究の分析と考察の結果、兵庫県北部におけるスキー場を中心とした地域振興について、次の４点の課題を提示したい。

(1)地域の観光資源を個別に開発するのではなく、スキー場を中心に、温泉、史跡、野外活動施設などとリンクして総合的な地域計画を調査立案する。

(2)各スキー場においては地元と開発運営企業との連携をはかり、地域一体となった開発を進める。以上２点については、千種スキー場の事例がモデルとなろう。

(3)各スキー場の立地条件に対応して、スキー客へのサービス向上のため、ナイター設備や託児所などの設置を進める。将来的には、交通ネットワークの整備によって生じたスキー客の時間的なゆとりに、十分応えられるようなスキー場施設の開発を図る。

(4)スキー場を到達点とした交通ネットワークの整備、とくに高速道路の延長と接続によって大都市圏との連結を一層強化する。千種スキー場に関しては、中国自動車道の山崎 IC と佐用 IC との中間に千種 IC（仮称）を新設するとともに、西河内集落からスキー場駐車場までの突衝き道路を改良すれば、さらにアクセスは便利になる。

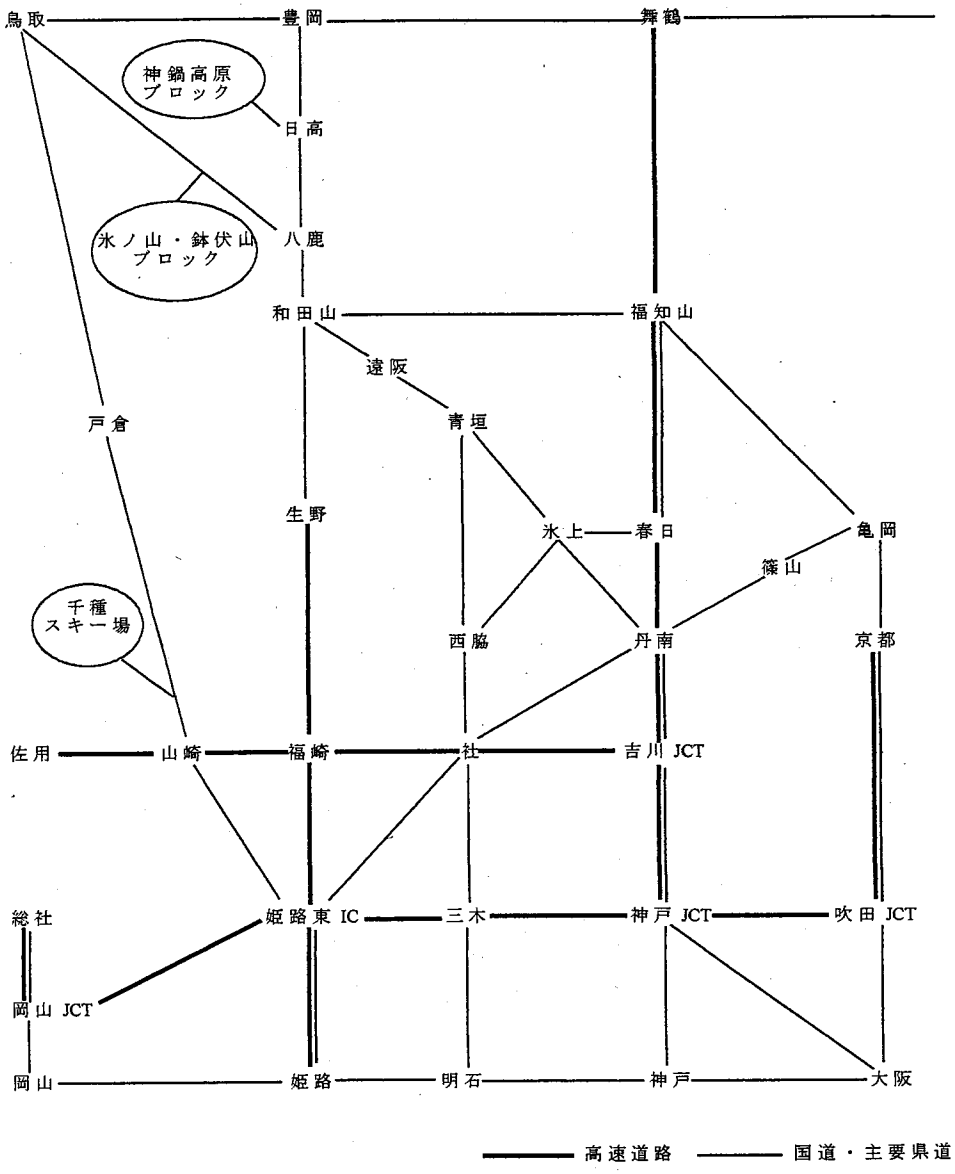

図５　兵庫県北部のスキー場へのアクセスルート（出所：筆者作成）